

# 北海道師範塾 塾頭通信

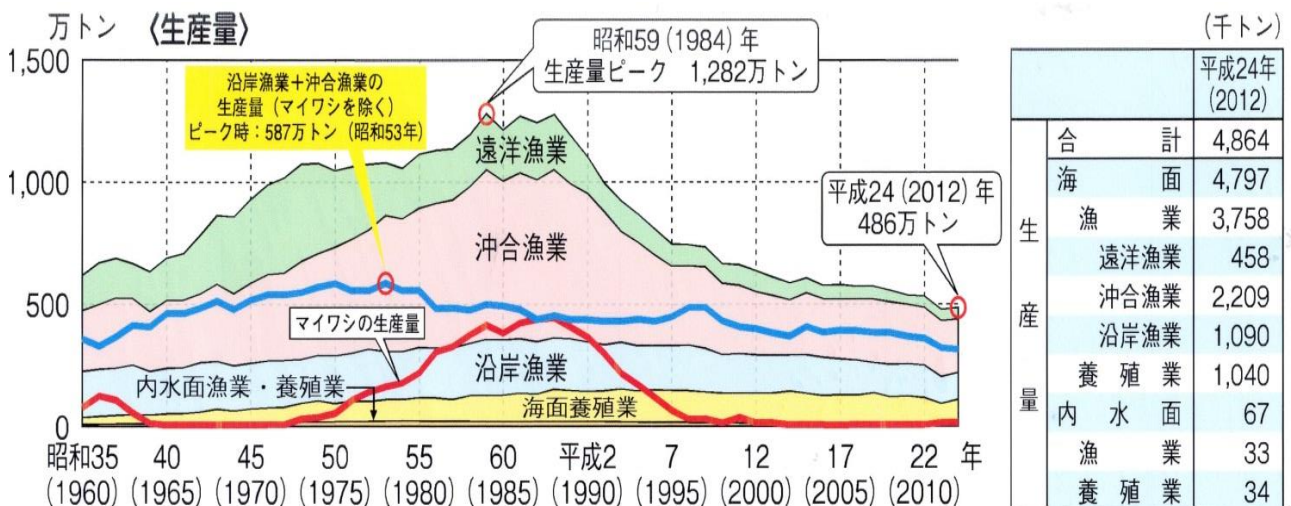
## 「教師の道」

第811号 平成26年9月30日

### 枯れゆく海（1）

「日本の海が枯れて行く」という言葉を聞くと、まさかと感じる人は多いと思います。田畑が枯れるように海も枯れるという事はあるのだろうか、という疑問です。しかし、現実には、確実に日本の海は枯れつつあるように感じます。

#### 漁業・養殖業生産量の推移



平成26年度版「水産白書」から転用しました。

海が枯れるというのは、畢竟、魚がいなくなるという事です。

マルハニチロ水産の社員で、北欧を主体とした水産物の買い付け業務の最前線で活躍して来た片野歩氏を始め多くの識者は、既に日本の海の厳しい現状に警鐘を鳴らして来ています。

今の若者達には全く想像も出来ない事だと思いますが、かつて日本は世界最大の漁獲量を誇る漁業大国でした。しかし、1977年（昭和52年）に排他的経済水域（いわゆる200海里漁業専管水域）が設定されて以来、日本の漁船は世界の海から排除される事となりました。

実際、我が国の漁業・養殖業の国内生産は1984年（昭和59年）にピーク（1,282万トン）に達した後、沖合漁業におけるマイワシの漁獲量減少や海外漁場からの撤退等により1988年（昭和63年）頃から1995年（平成7年）頃にかけて急速に減少し、その後も緩やかな減少傾向が続いています。更に、2011年（平成23年）に発生した東日本大震災も、漁業に取って大きなダメージとなって

いるようです（平成26年度水産白書から）。

こうした現状の中、朝日新聞特別編集委員の富永格氏は、5月4日付朝日新聞の「日曜に想う」という記事において、日本の漁業政策をノルウェーのそれと比較しながら、日本の漁業政策は近視眼であると厳しく指摘しています。

何を以て「近視眼」であるのかといえば、ノルウェー等の漁業は厳しい資源管理によって成長産業となっているのに対して、日本の漁業政策は、長期の視点、国際的な視点を欠き、衰退する漁業に有効な手を打てていないというものです。

片野氏は、ノルウェーでの漁獲量は船ごと・魚種ごとに厳格に決まっていて、彼等は、最も品質の良い時期に、最も価格が高い、大きくて脂がのった魚を獲って、出来るだけ高値で市場に買ってもらえるよう努力しており、先を争って獲りに行く事はない。ところが、非常に残念な事に、日本の漁業者及び漁業団体は、成功を収めている北欧の漁業に否定的だ、と述べています（同氏著「日本の水産業は復活できるか」から）。

そうした日本の漁業の体質は、政府だけの責任でもなさそうです。

水産白書（平成26年度）によると、我が国の漁業は、諸外国に比べ漁業者数及び漁船数が極めて多く、また小型漁船の割合も極めて高いという特徴があります。つまり、経営規模の小さな漁業者が非常に多いという事であり、これが、大胆な漁業規制をし難くしている要因の一つといえるでしょう。

また、水産白書では、我が国沿岸では、近世以前から漁業者が共同で地先の漁場を管理・利用してきた歴史があり、この「入り会い」の考え方の下、利用する関係者が「皆で決める」事が我が国の資源管理の基本となっている、と述べていますが、これでは、国の責任において強力に資源管理を進める事は容易ではありません。

（塾頭：吉田 洋一）